中学校三年　チャレンジ　話すこと・聞くこと

この音声問題は、第三学年国語問題の冒頭に放送するものです。

はじめに話すこと・聞くことにチャレンジしましょう。今から一回だけ、音声による問題を放送します。よく聞いて、あとの問いに答えてください。問題用紙は開かないでください。表紙のあいているところにメモを取ってもかまいません。

山本さんは、家族で旅行に行った際に、「能楽ものしり館」に行きました。「能楽ものしり館」には、能楽についてたくさんの資料が紹介してあり、立派な能舞台もありました。表紙に示してあるのは、能楽ものしり館にあった、音声で能楽について教えてくれる音声ガイドの画面です。この音声ガイドは、画面のボタンを押すと、音声で説明が流れる仕組みになっていました。

山本さんが、まず①番のボタンを押してみると、次のような音楽と説明が流れてきました。

（能楽の謡（うた）いを十秒間流す。）

「みなさん、能楽ものしり館にようこそ。能楽は日本の伝統芸能であり、歌や舞いのある音楽劇です。みなさんは今流れた音楽を聞いたことがありますか。この音楽は謡いと言い、能楽で謡われるものです。」

山本さんは、次に、②番のボタンを押しました。

「能楽の最大の特徴は、最小限の動きで感情を表現することです。笑い声や泣き声はなく、悲しい時には少しうつむきます。これをクモルと言います。もっと悲しい場合には手のひらを目のあたりに近づけます。これをシオルと言います。うれしい時には少し上を向きます。これをテルと言います。怒りなど強い意思を表す時は顔を対象物に向けます。これを面（おもて）をキルと言います。場合によっては主役であっても十分以上動かず座っているだけのこともありますが、これも演技のひとつなのです。地謡（じうたい）と言われるバックコーラスに気持ちを表現させて、じっとしたまま感情を表現するのです。」

次に③番のボタンを押すと、次のような説明がありました。

「能楽の歴史は古く、奈良（なら）時代までさかのぼります。芸術性が確立されたのは、室町（むろまち）時代と言われ、その後、織田信長（おだのぶなが）、豊臣秀吉（とよとみひでよし）、徳川家康（とくがわいえやす）などにより保護されてきました。音楽劇である能楽は、美しい舞台芸術として長い歴史を持ち、現代まで受け継がれてきています。」

また、④番のボタンを押すと、社会科の授業でも学習したことのある観阿弥（かんあみ）、世阿弥（ぜあみ）について紹介されていました。

「観阿弥、世阿弥の親子は、室町時代に活躍し、能楽を芸術として高めたことで有名です。世阿弥はけいこの心構えとして、『初心（しょしん）忘るべからず』という言葉も残しています。この言葉は、物事を始めたころのひたむきな気持ちを忘れてはならないという意味で、今でも習い事やスポーツの世界など多くの場面で使われています。また、現代では日本国内ばかりでなく、海外でも活躍する能楽師の方がたくさんいらっしゃいます。日本の伝統文化である能楽は海外でも広く紹介され、親しまれているのです。」

山本さんは、この後も見学を続けましたが、放送はこれで終わりです。

それでは、問題用紙を開いて始めてください。